

子ども未来・スポーツ社会文化研究所

2022 年度年報第 3 巻論文

関東における「郊外」スポーツの誕生

～羽田運動場の建設と利用～

(2022 年 10 月 15 日受付)

談話（関西大学大学院社会学研究科マス・コミュニケーション学専攻）

はじめに

羽田運動場は、1911（明治 44）年のストックホルムオリンピックへの日本初出場のための予選会を行ったことで知られている¹⁾。電鉄会社によって建設された点において、羽田運動場は後に建設された豊中グラウンドと同様である。

この豊中グラウンドは「甲子園発祥の地」とし、その名が広く知られている。豊中グラウンドは箕面有馬電気軌道（以下箕面電車）の郊外戦略の一環であることをすでに「20 世紀初頭のスポーツイベントと鉄道の『郊外』戦略」（談、2021）で明らかにした。小林一三は郊外開発の先駆者である。小林は 1909（明治 42）年に既に「田園都市」の価値を認識し、箕面電車沿線にそれを構築しようとした。小林の郊外戦略には以下の事業を含めている。1910（明治 43）年 3 月 10 日に開業した梅田から箕面、宝塚までの箕面電車、同年 11 月開園した箕面動物園、1913（大正 2）年 6 月 21 日に、開場した豊中グラウンド及び 1914（大正 3）年 4 月に婚礼博覧会の余興として登場した宝塚少女唱歌隊、そして住宅地については、小林は既に 1909（明治 42）年に池田に土地を買収し、翌年に住宅分譲を始め、さらに 1911（明治 44）年に桜井住宅地、1914（大正 3）年には豊中住宅地の分譲も行った。

また、豊中グラウンドで行われた日米大野球戦、日本オリンピック及び全国中等学校優勝野球大会などのスポーツイベントは全て新聞社と連携したため、その報道と同時に、他の郊外事業、例えば、宝塚少女歌劇団及び住宅地の宣伝なども連携して行っている。²⁾

¹⁾ 「羽田運動場は、それまで自転車競技場として使用されていた海辺寄りの平坦地に新設したもので、大森兵蔵総務理事が京浜電気株式会社（翼賛員）と交渉して、予選会で使用する了解を取り付けた場所だった。今後毎年競技会を開くという条件付きだったが、結果としてこの地で競技会が聞かれたのはこの予選会のみとなった。」（『日本体育協会・日本オリンピック委員会 100 年史』日本体育協会、2012 年、119 頁）

²⁾ 談話「20 世紀初頭のスポーツイベントと鉄道の『郊外』戦略」（黒田勇・森津千尋・水出幸輝編）『東アジアにおけるスポーツとメディア』創文企画、2022 年、37-54 頁

このような豊中グラウンドにみられるようなスポーツによる郊外戦略、スポーツイベントの新聞社との連携は、羽田運動場においてもみられるのだろうか。

そこで、本研究の目的を二つ設定した。まず、羽田運動場は箕面電車とは違って、京浜電鉄の郊外開発の一環として建設されたのではないことを京浜電車の各事業を考察することによって明らかにする。結論を先取りするなら、京浜電鉄は、当時のいわゆる「文化人」であった押川春浪たちに押されて羽田運動場の建設に出資したものの、実際の管理と運営には関与しておらず、押川春浪をはじめとする「日本運動倶楽部」に任せていたのである。次に、羽田運動場で行われたスポーツイベントにおいても、豊中グラウンドとは違い、新聞社が関わるのではなく、押川たちスポーツ同好の「文化人」たちが運営していたことを新聞記事等から明らかにする。

第1章 先行研究と押川春浪

1. 羽田運動場についての先行研究

羽田運動場の建設については、先行研究として馬場（2019）の研究がある。彼によれば、羽田は関東地方における総合運動場の先駆事例であるとしており、「大規模総合運動場が存在しなかった明治末期から大正初期まで」一般大衆がスポーツを観戦する機会を増やしたとする。

馬場は羽田運動場の設置目的について、羽田運動場の整備及び運営内容から検証した。彼は地形図、絵葉書及び『運動世界』の記事を通じて羽田運動場の整備を読み解き、なかでもスタンドに注目し、観客の収容によって羽田運動場はスポーツの普及に貢献したことを明らかにした。さらに、馬場は羽田運動場で開催された競技内容や頻度によって、1909（明治42）年から1911（明治44）年までを「野球場主要期」、1911（明治44）年から1913（大正2）年までを「野球場・陸上競技場併用期」とし、この二つの時期ともに多くの一般客が来場し賑わったとする。そして、「野球場主要期」は京浜電鉄、日本運動倶楽部、運動世界社の三者が緊密な関係を保ちつつ管理に当たった時期と指摘した。ただ、その関係と管理については簡単に事実のみを記している。

2. 天狗倶楽部と押川春浪

羽田運動場の建設に大きな影響力を発揮したとされる押川春浪という人物と、押川と天狗倶楽部の関係についてまず整理したい。

まず、押川春浪は「冒険小説家」として雑誌『冒険世界』の編集長を務めたことで有名であるが、明治学院の学生の時より、スポーツ、特に野球に大きな関心を持ち、東京の文人や有力者とともに「天狗倶楽部」を組織して自らスポーツを楽しむとともに、スポーツ振興のための

様々な活動を積極的に行った³⁾。

押川春浪をリーダーとする「天狗倶楽部」の正確な発足時期が不明だが、押川春浪自らの回顧によれば、「羽田運動場が出来たので中沢君やその他の連中と一日を豪快に健全に遊ぼうという……それも各々が昔取った杵柄——いやありし昔の香だけでも留めている野球がよかろう、それがよかろうと天晴れ一角やる積で、一味徒党をかり催して、羽田運動場へ押し寄せた。」

4) 1909 (明治 42) 年 5 月 24 日に柳川春葉、岩野泡鳴、鷺沢与四二、弓館、水谷及び他の早稲田の選手たちも「大分やってきて、所謂神武以来の珍試合を演じたよ。次が同じく羽田で、その時偶然来ていたやまと新聞チーム、即ち、正岡芸陽和尚を総大将とせる日本一の下手チームとの対戦だ。」⁵⁾ これが「天狗倶楽部対外試合の皮切りで、(中略) 爾来、敵さえあればいつでもやる。」⁶⁾ 「天狗」という名前の由来は萬朝報が最初に「天狗チーム」と呼び、いつの間にか固有名詞になったのだと横田順彌は説明する⁷⁾。

そして、押川春浪は、1911 (明治 44) 年に東京朝日新聞が提起した野球害悪論争の中で野球擁護派として論陣を張り、その議論のさなかに『冒険世界』を辞し⁸⁾、新たに自ら『武侠世界』を作り、羽田運動場を利用した野球大会、さらに「大運動会」を主催していく。

第 2 章 京浜電鉄の事業

本章では羽田運動場の設置者である京浜電鉄の初期の経営戦略を紹介する。

1. 初期の事業

『京濱電氣鐵道沿革史』(1949 年)によれば、京浜電鉄の設立当初の主な事業は電車事業の他、

³⁾ 朝日新聞社『朝日日本歴史人物事典』朝日新聞社、1994 年

⁴⁾ 横田順彌『〈天狗倶楽部〉怪傑伝：元氣と正義の男たち』朝日ソノラマ、1993 年、8 頁

⁵⁾ 同上、9 頁

⁶⁾ 同上、9 頁

⁷⁾ 同上、9 頁

⁸⁾ 押川春浪が『冒険世界』を辞した理由は、『武侠世界』第 1 巻第 9 号で自ら記している。「昨秋東京朝日新聞が『野球と其害毒』と題し、自家新聞の大勢力を憑んで、何故か我が體育界の發達に大妨害を加へんと」したが、押川は、「天狗倶楽部其他の有志と糾合し、猛然彼等を敵として戦へり。東京日々新聞の紙上を借つて約一箇月に互り彼等の愚論迂説を喝破せり。」さらに、「當時余の主宰せる『冒険世界』來月號に於て朝日の暴論を粉碎し盡すべき事を記載して之れを全國に配布し」ようとしたが、「此事を洩れ聴きたる當時の博文館編輯部長坪谷水哉氏は、大いに驚き余を呼んで、温言以て其記事掲載の中止を請はれた」ので、「余は斷乎として直ちに辞表を提出し」たと記している。

電灯事業、土地経営、遊園地、映画館などを多角経営していた。電灯事業は好成績だったが譲渡され、一方、土地経営や遊園地などがあくまで多角経営の一環としてなされているが、それらは大規模な事業ではなかった点で箕面電車とは明らかに異なっている。

そこで、京浜電鉄が箕面電車のように郊外開発の戦略を持っていたのかについて、京浜電鉄が携わった多角経営業と住宅地開発の二点から考察してみたい。その理由として、比較対象の箕面電車は郊外事業として箕面公園、宝塚少女歌劇団及び豊中グラウンドを携わったと同時に住宅地開発にも力を入れていた。それぞれの事業を組み合わせ、さらに乗車券割引、花火大会挙行などの促進のための補助施策も実施し、乗客誘致を進めた⁹⁾。

2. 多角経営

当時の京浜電鉄は主に羽田運動場、海水浴場と遊園地の開発に携わった。この中で羽田運動場は唯一独自開発であり、海水浴場と遊園地は他社と連携して開発した。

『京濱電気鐵道沿革史』の中に、以下のように沿線での事業を紹介している。

我が社沿線は東京及横濱兩市の膨脹に伴ひ、當然開發せらるべき地であつたので、會社として之に拍車をかくべく種々の計画を樹てた。即ち明治四十二年春には羽田（今の東京飛行場敷地）に方五町の大運動場を設けて乗客の誘引を計り、また夏期には報知新聞社及東京毎日新聞社（原文ママ、正しくは「東京日日新聞社」筆者注）と協力して羽田、大森及新子安に海水浴場を開設して京濱間の浴客を吸収した。海水浴場の開場式は明治四十二年七月十日午前十時から羽田海水浴場の廣場で舉行され、多數名士の來臨をかたじけなくした。〔中略〕更に明治四十五年、羽田運動場内に遊園設備をなし、また大師遊園地を造成して遊覧客を誘致し、大正三年には平岡廣高氏經營の鶴見花月園と協定し、同園設置の花月園前停留所は本社監督の下に竣工し、同年四月中旬開園と共に營業を始めたが、その年の十月には同園を補助すると云ふ趣旨の下に乗車、入園の割引連絡をなした。¹⁰⁾

海水浴場については、これより先、都市間電鉄として開業の阪神電鉄が1905（明治38）年7月に打出駅に独自に開設、さらに翌年、大阪毎日新聞と連携し、南海鉄道の浜寺において海水

⁹⁾ 談譚前掲書、37-54頁

¹⁰⁾ 京浜急行電鉄株式会社『京濱電気鐵道沿革史』1949年、51～53頁

浴場が開設されている¹¹⁾。関西では、こうした新聞社とタイアップしたスポーツ施設事業が展開されていた。電鉄と新聞社と連携して海水浴場を開設し「浴客」を吸収することはよく使われた乗客誘致の手段であっただろう。ただ、京浜電鉄としては、この事例が明治期において新聞社との連携が明確に記載された唯一の事業である。

さらに、羽田運動場内の遊園設備については、1911（明治44）年に海水浴場、翌年には遊園が造られたが、1917（大正6）年の高潮災害によって、その設備や運動場の観客席が破壊されたとされる¹²⁾。当時の「遊覧」乗客誘致の新聞広告においても、これらの遊園地は取り上げられていない。ただ、当初平岡廣高の元で経営されていた花月園^{かげつえん}については、駅を設置し「同園を補助すると云ふ趣旨の下に乗車、入園の割引連絡をなし」と、京浜電鉄の一定の関与を記している。海水浴場や遊園地事業なども、小規模ながら関西の阪神電鉄や箕面電車と同様の事業を一時は展開している。ただ、次項で述べるように、京浜電鉄の路線の立地条件、それにかかわる経営戦略からもこうした事業は限定的であったと言える。

3. 住宅地経営

京浜電鉄の沿線住宅地開発については、明治期に小冊子を発行して郊外住宅地の情報を発信している。1910（明治43）年1月に発刊された京浜遊覧案内^{まづかれいすい}に遅塚麗水^{おそづか}の一篇がある。

更に京濱電気鐵道會社にては近頃京濱地主協會と云ふを創立し、京濱間所在の貸地、賣地、貸家、賣家を調査紹介して公平親切なる仲介者となり、協會の仲介に係る移住者には乗車券の大割引をなして市内への通勤通學の便利を圖り、日用品、家財器具の輸送にも特別の取扱ひをなし、又沿道各地に信賴すべき醫師醫院を紹介して診察料、醫藥料の特減を計り、確實なる使屋を毎日東京へ差遣して日用品の購買配達の方法をも講じ居れば都市の生活に比較して毫も不便^{ごう}を感じることなし、加之^{しかのみならず}沿道到る處名所古跡に富めることは案内記すが如く、（後略）¹³⁾

上記のように、京浜電鉄が全く沿線の土地・住宅開発等に関心がなかったわけではない。ただ、明治期においては本格的な土地開発を行わず、「京濱地主協會」を設立して沿線の貸地や医師医院も調査紹介し、その上で乗車券割引、都心での買い物代行などをして乗客誘致を図って

¹¹⁾ 黒田勇『メディアスポーツの20世紀』関西大学出版部、2021年、121頁

¹²⁾ 京浜急行電鉄株式会社『京急グループ110年史 最近の10年』2008年、21頁

¹³⁾ 京浜急行電鉄株式会社(1949)前掲書、51～53頁

いる。この段階では本格的な沿線開発に着手しておらず「仲介者」だと自らを位置づけている。

『京浜急行八十年史』によると、「実際に宅地を造成し、住宅を建てて売り出したのは、先にふれたように大正3年の生麦住宅地の分譲で、その規模は、当時の案内図によって、大体の区画数を知ることができる¹⁴⁾と、最初の本格的な住宅地開発として、1914(大正3)年の生麦住宅地を上げている。

さらに、この時期より16年後には、「国内工業の勃興は、京濱間を一大工業地域とするの氣運に導き、將來の發展を期待せらるるに至つたので」、京浜電鉄も「之に對應して、海岸地帯の交通機關整備と工場經營とを計画した。」¹⁵⁾京浜電鉄は川崎運河及び工場經營のために、1918(大正7)年に28万余坪の土地を買収し、1922(大正11)年に工場と住宅地を竣工し約19万5千坪を販売した。その中の3万4千3百坪は同年中に売約した。さらに、1924(大正13)年震災後郊外住居者が激増したこと及び工業界不振のため、川崎の工場地を住宅地に変更し住宅附土地として発売され好成績を示したとする。

このように、京浜電鉄の住宅地經營事業は、生麦住宅地等、箕面電車開業以前に開発はしているものの、箕面電車のそれより遅れて始まるだけではなく、工業用地の開発と合わせて行われ、箕面電車のような、「健康」で「文化的生活」をめざす「郊外」開発とは異なるものだった。

それでは、その中で「羽田運動場」の建設はどのように位置付けられるのだろうか。

第3章 羽田運動場

1. 京浜電鉄の路線

京浜電鉄は関西の阪神電鉄とともに、「都市間電鉄」の先駆けとも言われているが、営業を開始した1899(明治32)年当時は、他の電鉄と同様に「参詣電車」として出発している。京浜電鉄(当時は大師電気鉄道株式会社)の「營業線は川崎六郷橋から、今の大師停留所に至る一哩餘の小區間で、車輛數は三臺と連結車二臺の而も單線運轉で、午前七時から午後六時乃至八時迄を營業時間とした」¹⁶⁾。営業を開始したのは1899(明治32)年である。六郷橋・大師間鉄道(大師線)は川崎大師参詣客が主な乗客だった。当時「東京横濱からの参詣者中には、川崎停車場から二人乗の人力車に依り参詣する者多く、又縁日には其の間に混つて乗合馬車も走つてゐた」¹⁷⁾という状況であつたので、軌道敷設反対の先頭に立つたのが人力車夫組織「だるま組」

¹⁴⁾ 京浜急行電鉄株式会社『京浜急行八十年史』1980年、489頁

¹⁵⁾ 京浜急行電鉄株式会社(1949)前掲書、56頁

¹⁶⁾ 京浜急行電鉄株式会社(1949)前掲書、1頁

¹⁷⁾ 京浜急行電鉄株式会社(1949)前掲書、16頁

の一团であったという¹⁸⁾。

1901（明治34）年2月に川崎から大森までの営業運転を開始し、さらに、後に羽田運動場が建設される羽田支線は蒲田から稲荷橋までは1902（明治35）年6月に営業を開始した。羽田線に加えて、同年8月末に六郷橋から川崎までの路線が神奈川延長第一期線として翌9月開始した。これに対し、大森・品川間は、1904（明治37）年5月に運転を開始し、品川から川崎までがつながった。ただ、現在のように品川から横浜駅までの「都市間電鉄」としての路線が開通したのは20年以上後の1930（昭和5）年2月であった。

ところで、羽田支線は大師線と同じく穴守稲荷への参詣客が多い支線であった。羽田支線は元々乗客が多く、したがって、さらに羽田運動場を作って乗客を誘致する必要がなかったと思われる。

2. 羽田運動場の建設

先に引用したように、『京濱電気鐵道沿革史』には「我が社沿線は東京及横濱兩市の膨脹に伴ひ、當然開發せらるべき地であつたので、會社として之に拍車をかくべく種々の計画を樹てた。即ち明治四十二年春には羽田（今の東京飛行場敷地）に方五町の大運動場を設けて乗客の誘引を計り」とするが、この路線の開設に合わせて羽田運動場の建設が構想されていたという資料は見当たらない。

1908（明治41）年12月27日東京朝日新聞の記事「大運動場新設計畫」には以下のように記されている。

帝都に共通の大運動場なきは一の缺點として運動家の常に遺憾とする所なりしが、京濱電気鐵道會社は今回羽根田村穴森神社附近に一萬餘坪の地所を買入れ、之を公共の運動場に充てんと同社の中澤技師長及び冒険世界の主筆押川春浪兩氏委員となり、一昨夜都下各新聞社の運動記者及び運動家有志者を烏森の湖月に招き、運動場の設備及び使用上の事に關する談話をなせり、…言ふ迄もなく間接に京濱電車の乗客を増加せしめむとする永遠の利益を見越したるものにて、會社は一萬坪餘の地所と數萬圓の設備費とを擧げて運動俱樂部に提供したるものなり、工事は來春四月開花の頃までに竣工して開場の運びとなるべし。

¹⁹⁾

¹⁸⁾ 京浜急行電鉄株式会社（1949）前掲書、16頁

¹⁹⁾ 以下、原記事にはない読点を入れた。

この記事では、羽田運動場の建設計画について、京浜電鉄が主語となっているものの、電鉄の経営戦略という側面よりも「運動家」の思いが中心となっている。さらに、「会社は一萬坪餘の地所と數萬圓の設備費とを擧げて運動倶楽部に提供したる」と、京浜電鉄の直接の事業として位置づけていないことが伺われる。

さらに、3日後の東京朝日新聞の記事によれば、「京濱電車が羽根田海岸地一萬坪を公開運動場敷地として京濱運動家有志者に提供、其使用方を委託したるにつき有志者は京濱兩所を打つて一團とせる一大遊技倶楽部を設立するに決し、一昨々夜取敢へず發起人會を開き種々協議の上、創立委員十名（東京運動記者倶楽部より七名其他より三名）を選出し、猶工事世話人一名をも定め直に規約起草委員を選擧したるが追て原案の成るを待ちて、來一月中旬第一回創立委員會を開き大日本體育協會の名稱の下に一大倶楽部を成立せしむる事となりたり」²⁰⁾。「委託」という形で、羽田運動場は京浜電鉄ではなく「有志者」達にその管理・運営が任せられている。なお、東京運動記者倶楽部について詳細な資料は見当たらないが、押川春浪もその一員ではないかと考えられる。これを裏付けするのは、同じ1908年12月16日に東京運動記者倶楽部主催の體育大講演會において「當日の辯士は鎌田慶應塾體育學士、大森平蔵、向軍治、ブレース、押川春浪、大學生中野武二など諸氏の外、大隈伯爵も出席せられ體育的遊技に關する雄辯を振るはる」²¹⁾という東京朝日新聞の記事である。「一大倶楽部」も羽田運動場とほぼ同時に成立された日本運動倶楽部のことだと考えられる。また、翌年の『運動世界』には「日本運動倶楽部成る一宏大なる羽田の運動場……都下の一大樂園……帝都の面目」という文章で、羽田運動場は押川春浪たちの努力で建設されたとしている。

3. 「日本運動倶楽部」の設立

前項で羽田運動場建設に関わられた「一大倶楽部」と紹介された団体は、最終的には「日本運動倶楽部」という名称となった。日本運動倶楽部は日本の運動（スポーツ）を社会に普及し、スポーツを一般民衆の間で振興するための組織であると、当時の『運動世界』には、以下のよう

日本運動倶楽部とは如何、云ふ迄もなく日本の運動をして社會一般に普及せしめ、其が活趣味を以て天下を清浄せんとする一大文明事業たり。

曩さきに押川、中澤の諸氏この遠大の希望を抱いて努力工作すくな尠すくなからず、幸に京濱電鐵會社

²⁰⁾ 東京朝日新聞「東洋一の遊技大倶楽部 ▶水陸兩競技場の設備」1908年12月30日付

²¹⁾ 東京朝日新聞「體育大講演會」1908年11月15日付

の同情を得、今日の羽田運動場を形成せり。されどそは唯に一つの階段に過ぎず、更に更に大計圖を以て、野球庭球の競技場は云ふ迄もなく、各種團體の運動會場に適すべきもの大花園、大浴場、各種清壯なる娯樂の機關等、老若男女が四時(原文ママ)の遊園として最も愉快に、最も健全に郊外一日の清遊を期し得べき大樂園を構成せんとし、幾多有力者の贊助^{さんせい}と後援を得て、茲に日本運動俱樂部なる公共團體を設立するに至れるなり。

即ち東京市長尾崎行雄氏を會頭に、和田垣博士を副會頭に戴き、押川春浪、中澤臨川、田村三治、安部磯雄、鷺澤與四二、水谷竹紫等の諸氏理事として事に當り、益々其歩武^{ほぶ}を進めんとす。²²⁾

まず、この文章から、羽田運動場は押川春浪たちの努力で建設されたとしていることが伺える。「京浜電鉄の同情を得た」という記述からも京浜電鉄が主体となって積極的に運動場を建設したのではなく、あくまで空き地の活用に協力したという側面がここでも裏付けられる。

さて、日本運動俱樂部の組織については、尾崎行雄の他、副会頭には帝国大学教授だった和田垣謙三に依頼し、そのほか押川春浪と交友のあった早稲田や慶應の卒業生や野球部関係で理事を構成している。また、日本運動俱樂部の主な事業とその目的及び資産は「社団法人日本運動俱樂部定款^{ていかん}」によって定められた。そのなかには、「種々の運動競技を開催して國民の體育を奨励し振武の氣風を鼓吹する」「完備セル運動競技場を設け學校團體及個人の利便に供する」「直接の運動競技以外に於ても清遊し得べき娯樂場を設け一般國民の樂園となす」と、規定されている。資産に関しては、「京濱電氣鐵道株式会社が本俱樂部に提供せし一定年限間の土地使用權及運動場の設備より生じたる収益」「有志者よりの寄付金」と説明している。日本運動俱樂部の「事務所は東京府荏原郡羽田村^{えぼら}」と述べている。²³⁾

上記のように、日本運動俱樂部とは、京浜電鉄が建設した羽田運動場を運営・利用する団体として位置づけられている。ただ、前項の新聞記事の「大日本体育協會の名称の元」の組織とはならなかった。

翌1910(明治43)年の『運動世界』では、水谷竹紫が「郊外運動場は帝都の面目なり」において、完成した羽田運動場に言及している。

されど尚或人は土地が不便だと云ふ、(中略)何が遠い?何が不便?道を聞かんとする

²²⁾ 『運動世界』1909年6月号(第15号)、139~140頁

²³⁾ 同上、140頁

ものは千里を遠しとせず、活潑有為の青年がかほどの不便^{いと}を厭ふてよいものか。²⁴⁾

後述するように、羽田運動場では様々なスポーツ大会が開催されるが、この文章からは、当時羽田運動場の立地が不便だとの評判があったことが推測できる。不便という欠点にもかかわらず、水谷は羽田運動場が日本帝都唯一の郊外大運動場である意義を、以下のように強調している。

運動場には廣大なる地面が^{にゆうよう}入^{つちいっしょうかぬいっしょう}要である、土一升金一升の帝都の地に此廣大なる運動場を設く可らざるは自明の道理で、歐米の各都は何れも其都府の面目として郊外數里の地に格好の運動場を有せざるものはない。

日本の帝都として百五十萬の都府として僅に一個の郊外運動場を過去に有せざりしは餘りに高い聲でも話されぬ次第、郊外運動場の切要は眼ある人の頭脳には何れも宿つて居た事であろう。

それが羽田に出来たのだ。茲に於て大日本帝國の帝都は初めて一個の郊外運動場を有した譯なのだ。羽田は京濱の中心其都を去ること遠からず、加ふに海あり温泉あり、蛤鍋^{はまなべ}もあれば煎餅の名物もある。蓋し穴守^{けだし}の御利益を希はずとも郊外運動場としては好適の地と云いねばならぬ。獨り僕が此運動場の經營者として機能を述べ立てるのぢやない、物の道理をよく考へて見れば當に然るべき^{ゆいん}所以を發見するであろう。²⁵⁾

日本初めての郊外運動場という意義を強調すると同時に、羽田運動場を使ってスポーツをすることを呼び掛ける。さらに、「獨り僕が此運動場の經營者として機能を述べ立てるのぢやない」との記述からも、羽田運動場の実際の經營者は京浜電鉄ではなく、水谷竹紫が理事を務める日本運動俱樂部であることが伺える。

改めて整理すれば、羽田運動場は、京浜電鉄の郊外戦略、あるいは乗客誘致政策の一環として生まれたものではなく、押川春浪たち、東京のスポーツ愛好者たちによって生み出されたものだったのである。

第4章 羽田運動場でのスポーツイベント

『京濱電氣鐵道沿革史』によると、羽田運動場の竣工は3月だが、東京日日新聞及び朝日新

²⁴⁾ 水谷竹紫「郊外運動場は帝都の面目なり」『運動世界』、拡大号（第24号）、1910年、26頁

²⁵⁾ 同上、26～27頁

聞両方に報道が見当たらず、4月4日、5日に行われた神戸東京両倶楽部の野球試合をもって羽田運動場が公式に開場されたと考えてよいだろう。²⁶⁾ ²⁷⁾

1. 「東京倶楽部」の結成

後に、羽田運動場を使用することとなる「東京倶楽部」はどのように組織されたのか。

新聞紙面上は、「東京野球倶楽部」「東京チーム」という記述も登場するが同一団体であり、以下説明するように、要は野球をするために組織されたクラブである。

東京朝日新聞の記事「東京チームの成立」によると、東京倶楽部は慶應義塾大学、早稲田大学と学習院の卒業生、一高の卒業生らによって結成された野球チームで、慶應義塾大学と早稲田大学と競技し、練習の相手になっていた。この東京倶楽部のメンバーは「第一流の選手たりして櫻井、青木、吉川（以上舊慶大）河野、押川、田部（以上舊早大）三島（舊学習）中野（舊一高）及び檜葉等の古武者は目下銀行員又は実業家となり或は一年志願兵として入営中の者もあり或は帝大に在学中のものもあり今回此等の諸氏相集りて一の東京倶楽部を組織し…（後略）」（東京朝日新聞、1908年11月3日付）と記事は記している。



1908（明治41）年11月3日付 東京朝日新聞 4ページ

メンバーの中の押川とは、押川春浪の弟、押川清であり、早稲田大学出身で、在学中に野球部の一員として米国遠征にも参加している。

さらに、同じ日付の時事新報には「東京倶楽部の活動（三田綱町グラウンドに於て）」をという記事が掲載されている。

其活動は世の^{ひとえ}偏に刮目する所なるが機運今や漸く熟して愈々三日天長の佳節^{ほく}を卜して
 三田綱町グラウンドに於て午後二時より久し振りに昔しの杵柄を執らんとす、之が敵手は
 布哇より歸來後全勝の意氣當るべからざる慶應選手なり、東京チームの名將、假令^{たとえ}半年
 以上球を手^{よりぬ}にせざりしとは云へ何れも選抜きの精鋭を盡したるもの慶應選手決して油断
 あるべからず、此試合こそは^{しばしせきりょう}少時寂寥の思ひありし我野球界に活氣^{あた}を與ふるものならん、

²⁶⁾ 時事新報「運動競技界」1909年4月1日付「同運動場は過半來着々準備中なりしものにて此競技を以て同場の開始式とも見るべく」

²⁷⁾ 馬場信行前掲論文、368頁。馬場は「東京倶楽部は早稲田大学野球部OBが大半」と言及したが、神戸倶楽部について記述がない。

苟^{いやしく}も野球の趣味を解するものは綱町に行け兩軍のメンバー左の如し因に當日の入場料は一等二十銭二等十銭²⁸⁾

上記「少時寂寥^{しばしせきりょう}の思ひありし我野球界に活氣^{あたら}を興ふる」とは、早慶戦が1906（明治39）年に中止されたことを意味している。

こうして、東京倶楽部結成後初めて、1908（明治41）年11月3日慶應大学と三田綱町グラウンドにおいて試合が行われた。さらに11月15日に早稲田大学との試合も戸塚原頭（後の戸塚グラウンド）において行われた。翌年の神戸倶楽部との試合も三田のグラウンドで行う予定であった²⁹⁾。ただ、両グラウンドとも大学のグラウンドであり、たとえOBたち中心のチームの試合とはいえ、一般民衆を受け入れて継続的に有料で観戦させるのは難しかったかもしれない。先述のように、この間に羽田運動場建設への働きかけは進んでいた。

改めて確認したいが、この時には「日本運動倶楽部」は組織されていない。しかし「東京倶楽部」の組織と活動がベースとなり、メンバーも重なりつつ羽田運動場の運営団体である「日本運動倶楽部」という名称が生まれたと考えていだろう。

2. 「神戸東京倶楽部野球試合」

先にも述べたように、羽田運動場開設後の最初の報道は、1909（明治42）年4月4日、5日に行われた神戸東京両倶楽部による試合「神戸東京倶楽部野球試合」である。

1909（明治42）年4月3日付の時事新報は、神戸倶楽部が上京し、練習を行った記事「神戸選手の練習 技倆^{あなどりがた}侮り難し」という記事を掲載している。

神戸倶楽部の選手は「中壘日向温、第一壘（キャプテン）泉谷祐勝、補缺長谷中悦二郎、投手菅瀬一馬、マネジャー酒井良太郎、補缺海本浚治、第三壘高濱茂、部員岡本知次、右翼奈良崎健三、捕手松田捨吉、左翼高濱総一、第二壘藤田繁二、游撃佐々木勝磨」と紹介している。

³⁰⁾

このように、神戸倶楽部のメンバーの多くが慶應、早稲田の野球部OBであった。菅瀬一馬、奈良崎健三、佐々木勝磨、高濱茂は慶應義塾野球部の部員で、2年後の1911（明治44）年第一回米国遠征時にもOBとして参加している³¹⁾。この時、神戸倶楽部の一員として出場した早稲田

²⁸⁾ 時事新報「東京倶楽部の活動（三田綱町グラウンドに於て）」1908年11月3日付

²⁹⁾ 東京朝日新聞「運動界 神戸倶楽部上京」1909年3月23日付

³⁰⁾ 時事新報「神戸選手の練習 技倆^{あなどりがた}侮り難し」1909年4月3日付

³¹⁾ 慶應義塾『慶應義塾百年史』中巻 前1960年、438頁

OBの泉谷祐勝は天狗倶楽部にも加わっている。

4月5日付の時事新報は始球式について言及している。

三日舉行の筈なりし神戸對東京倶楽部野球試合第一回戦は、四日午後四時より新に成りし羽田グラウンドに於て舉行されたり、大雨後のグラウンドは容易に使用し得べくも見えざりしが、係員の盡力にて兎も角も競技を行ふに足るべく成立せしめたる其勞や多とすべし、審判は阿部、西尾両氏つかさど司りしが、此日三井銀行理事波多野承五郎氏令嬢ハナ子(九)がピッチアースプレートに立ちての始球式は頗る振へり、花の如き濃紺色の洋装せるハナ子が可愛き赤手に球を持ちての姿勢が如何に優雅なりしよ³²⁾

波多野承五郎は時事新報の主筆であるため、彼の娘が始球式を務めた様子を詳しく掲載したようであるが、この試合あるいは両倶楽部への時事新報の関わりが想像できる。前日の大雨の原因で、羽田運動場は泥沼になり、係員の尽力で競技が行えるようになった。しかし、時事新報は運動場の不備より、スタンドが満員であったことに注目した。

4月6日の記事には「東京野球倶楽部は遠來の神戸野球倶楽部の一團を羽田の新グラウンドに邀へて奮戦し四日の第一會戦には脆くも五プラスA對一にて敗戦に歸したるが」と記したのみで、あとは試合の経過と結果だけを伝えた。



一方、東京朝日新聞は羽田運動場の状況について時事新報よりも詳しく記している。

神戸東京兩倶楽部の野球仕合は神戸方滞京の都合上競技を急ぎ前日來の降雨にも拘らず一昨日午前九時より晴模様なりしを以て羽田新設運動場にて催す事に決定したるも、何分海濱の埋立地を急に工事せし事とて全面沼の如く迎も役に立ち相もなく、多數の工夫を

³²⁾ 時事新報「東京對神戸野球試合（第一回）」1909年4月5日付

督勵して排水し間に合せのグラウンドにて漸く午後三時半より慶應阿部、早大西尾兩氏の
審判の下に競技を開催せり、然れ共外野の方は尙水溜多く内野さへ球のバウンドし
能はざる程の泥濘にて仕合も困難に興味亦頗る銷然たる者なりき³³⁾

羽田運動場の立地は海浜の埋立地で、開場時にはまだ十分整備されていなかった。試合当日も雨のため冠水し、午後まで排水工事を行われたと、時事新報と同様に羽田運動場を描写している。この記念すべき羽田運動場での初の野球試合であるが、羽田運動場の状況についても試合の運営についてもこれ以上の資料は見当たらない。

ただ、両倶楽部の選手構成や審判から見ても、東京倶楽部が主体となって、神戸倶楽部を迎えての試合だったことが伺える。さらに、両倶楽部の構成員たちは早慶戦を戦ったOBたちや押川春浪を中心に集まった旧知の野球同好の士たちであったといえるだろう。

3. 「都下中学連合野球試合」

「神戸東京倶楽部野球試合」が行われた翌年、1910（明治43）年3月30日と31日には、羽田運動場で、「都下中学連合野球試合」が開催された³⁴⁾。この大会は、早稲田、慶應、青山、郁文、麻布、立教、錦城、獨協の八校が参加したが、その後、固定された名称をもたず、毎年違う名称で呼ばれ、1915（大正4）年まで続けられた。

この大会は先に触れた東京運動記者倶楽部が主催したとされる³⁵⁾。大会は3月29日午前9時より三日間羽田運動場で実施予定だったが、雨天のため順延され、30日に行われた。東京朝日新聞は「都下中学連合野球大会」、「中学連合野球試合」などと呼び、東京日日新聞社も「中学連合野球大会」と呼んでいた。3月30日付東京朝日新聞によると、この年の試合には「各所より寄贈の賞品多く」、東京朝日新聞社も新聞購読券九枚を賞品として提供した。

4月1日付東京朝日新聞には、以下のような記事が掲載された。

都下各中學聯合野球試合の初日は三十日午後一時過から寒い寒い潮風の吹巻くる羽田のグラウンドに於て舉行した、天氣模様の怪しかりし爲めか應援團學生の外観客はなかつたが、司會者や選手の面々は何れも元氣旺盛であつた、早大の安倍先生臨場

³³⁾ 東京朝日新聞「神戸軍の大勝」1909年4月6日付

³⁴⁾ この大会については、大和球士『真説日本野球史 大正篇』ベースボールマガジン社、1977年、52-53頁にも記載されているが、この時には存在しない『武侠世界』主催としている。

³⁵⁾ 読売新聞「中學優勝試合（本日）東京運動記者倶楽部主催」1910年3月29日付

して始球式を行ひ、夫より慶大の福田、早大の伊勢田両氏復審の下に早稲田中學と青山學院との試合となる（後略）

この都下中学連合野球大会は東京運動記者倶楽部主催とされるが、始球式は安部磯雄がつとめ、また、翌日の記事には、天狗倶楽部メンバーである獅子内謹一郎が副審を務めたとの記載があり、安部磯雄が理事をしていた日本運動倶楽部ないし天狗倶楽部の関与あるいは支援のもとに実施されたことは間違いないだろう。そして、羽田運動場の計画時から登場する「東京運動記者倶楽部」の構成員の詳細は不明ではあるが、前述のように、その構成員は押川春浪他、日本運動倶楽部ないし天狗倶楽部の構成員と重複していた可能性があるだろう。

1911（明治44）年になると、東京朝日新聞社は「中学試合」あるいは「中学争覇戦」と呼ぶようになる。3月30日及び4月1日の東京朝日新聞の記事には羽田運動場に関しての言及はなく、試合の様子だけを伝えている。4月1日の記事「花曇る三十日満都中學生の若き血潮を湧かしたる中學争覇戦の決勝試合は羽田にて戦はれた（後略）」によると、当時の都下中学連合野球大会は人気があったと推測できる。東京日日新聞社は「都下中学優勝試合」と呼ぶ。羽田運動場に関しては開催場所として以外に全く言及していない。

以上の記事は京浜電鉄に関して、乗車勧誘の広告だけではなく、乗車券割引及び関連の他のイベントなど一切言及していない。

4. 『武俠世界』による「聯合大運動會」

1911（明治44）年の東京朝日新聞による「野球害毒論」争で擁護側の中心にいた押川春浪は、1912（明治45）年に博文館を退社し、『武俠世界』を創刊した³⁶⁾。これ以前の都下中学連合野球大会は東京運動記者倶楽部主催とされていたが、1912（明治45）年大会では『武俠世界』雑誌と日本運動倶楽部の主催と明記された。さらに、この年には連合大運動會という呼称となるが、野球以外に庭球、競走（陸上競技）、角力も加えられた。『武俠世界』（1912年第1巻第4号）の記事「各中學 商業 師範 聯合大運動會」では、大会が以下のように紹介されている。

我等は茲に此の理想を實行する第一手段として、斯界のオーソリチーたる日本オリンピック大會の協賛を得、日本運動倶楽部と共に理想的な一大運動會を開催せんとす。期は春風漸く温き陽春の候にして、地は郊外の絶勝羽田海濱たり、青春の意氣潑潑たる數千名の青年諸君が熱球雲を掠め、鐵脚風を生ずる底の一大快技は隨に近來絶無の壯觀なるべき

³⁶⁾ この退社について押川は、博文館の経営陣が東京朝日との論争を避けるためと回顧している。

を信じて疑はず³⁷⁾

この大会でも野球の審判は獅子内謹一郎と押川清で、陸上競技の審判は三島弥彦と泉谷祐勝であった。こちらもまた天狗倶楽部のメンバー達である。また、「日本オリンピック大会の協賛」の意味は不明だが、前年秋にオリンピック予選を主催した大日本体育協会のことを指すのかもしれない。

さて、『武侠世界』（1912年第1巻第5号）ではこの運動大会の詳細を「本社主催大運動會痛快記」というタイトルで掲載した。その記事によると、この大運動會に参加する各中学、商業、師範の申込書は「山の如く集り」、4、5校を断らなければならない状況であったという。以下に、羽田運動場に関する部分を抽出する。

偕^{さて}聯合運動會の第一日^{じつ}は豫定の如く三月廿八日を以て羽田の運動場に開かれた。前夜の雨残りなく霽^はれ絶好の運動日和となつたので、見物の人々、東京より、横濱より朝^{うち}の中から續々と詰かけ、三方の大スタンドは殆ど満員の賑ひであつた。唯残念な事には運動場濕潤の爲に午前中の番組を行ふ事が出来ず、乾燥を待つて午後一時から横濱商業對大倉商業庭球戦を始めたが、横濱方が優退一組^{いだ}を出し、後互に一勝一敗の所まで行^やつた時、俄^{にはか}に強風が吹出し、到底續行する事が出来ないので、已むなく没収試合とし、爾後早稲田大學庭球部の厚意により其コート^そを借りて續行する事に改め、斯^{かく}て二時半より別に立教中學對慶應普通部の野球戦^やを行^やつた³⁸⁾

(中略)

廿八日午前十一時^{たたかひ}戦は横商と大倉とに始まつたが不幸にして中途烈風の爲め中止するの止むなきに至つた、羽田は海岸故或ひは試合の進行を妨ぐる事あつてはと、主催者の方で新に早稲田大學のコートを借り受けて翌日より此處^{こゝ}で試合をする事とした。³⁹⁾

これまでの記事からも、野球を中心として人気で羽田運動場は大盛況であつたが、相変わらず地面は軟弱で、風も強く吹く立地であつた事が理解できる。風が大きく影響する庭球のようなスポーツにとって羽田運動場は適切な場所とは言えず、これ以降庭球は別の場所で行うことになったようである。

³⁷⁾ 武侠世界「各中學 商業 師範 聯合大運動會」1912年、第1巻第4号、126-127頁

³⁸⁾ 「本社主催大運動會痛快記」『武侠世界』1912年、第1巻第5号、114頁

³⁹⁾ 同上、115頁

この大運動会には、前年にもまして多くの企業・新聞社が賞品を提供している。例えばスポーツ用具の美津濃商店、『冒険世界』は金牌一つと銀牌一つを寄贈した。大阪毎日新聞社も懐中銀時計を寄贈した他、新聞社からは、やまと新聞社、実業之世界社、日本新聞社、中央新聞社が新聞購読券、報知社、読売新聞社、朝報社及び東京時事新報社は銀メダルを寄贈している。前年「野球害毒論」の論陣を張り、天狗倶楽部などを強く批判した東京朝日新聞社も奨励品として新聞購読券を寄贈している。⁴⁰⁾ それでは、「野球害毒論」で押川春浪らと対立した東京朝日新聞社はどうかの大運動会を取り扱ったかのだろうか。

東京朝日新聞社によるこの大運動会の告知が3月28日5ページ目の片隅に小さく掲載されている。「本日の羽田運動會」との見出しで「廿八日より卅一日迄羽田運動場にて開催せらるゝ武侠世界主催運動會の本日の取組左の如し」とある。さらに、「愛知一中の東上」の見出しで「愛知縣第一中學野球遷(選)手は羽田運動會に参加の爲め東上し、卅日正午より横濱商業と卅一日本年度各中學聯合野球戦優勝者と決戦する由」と愛知一中の参加を報道している。



1912 (明治45) 年3月28日付
東京朝日新聞朝刊 1ページ

それとは対照的に、同日の同紙の1面に『武侠世界』が自ら出した広告が掲載されている。そこには「各中学商業師範聯合大運動會 三月二十八日より四日間羽田大運動場に於て舉行す 京濱電車割引あり、詳細は本誌を見よ」と記されている。

3月31日と4月3日に東京朝日新聞もこの大会の庭球や野球試合についての記事を掲載した。両記事は試合の経過と結果に注目し、羽田運動場を開催場所として言及しただけで、評価などを行っていない。

主催の『武侠世界』における記事の量と内容と東京朝日新聞社のそれとは明らかに差がある。この件に関する両者の確執については、明確な史料を発見できていないが、東京朝日にとっては、「野球害毒論」を打ち上げた後、擁護派の押川らが主催する大会に全面的に便乗する記事を掲載しにくかった可能性もあるだろう。

一方、この一連の大会についても羽田運動場の所有者であるはずの京浜電鉄の関与がほとんど見られない。先述の『武侠世界』の広告での乗車券割引の告知以外ではこの大会に関わる京浜電鉄の広告、例えば乗車券割引、他イベントの宣伝など一切見当たらないことも注意すべき

⁴⁰⁾ 「本會の趣旨を賛成し運動奨励の爲め特に賞品を寄贈せられたる諸君左の如し」『武侠世界』1912年、第1巻第4号、128頁及び「本社主催の學生聯合大運動に運動奨励の爲め特に賞品を寄贈せられたる諸君左の如し」『武侠世界』1912年、第1巻第5号、後付の一頁

点である。⁴¹⁾ 京浜電鉄には大会に関わっての「乗客誘致」のための努力を見出すことはできない。

おわりに

以上の章で、羽田運動場の建設と運営について明らかにしてきたが、本稿の課題は、「郊外」運動場の嚆矢とされる羽田運動場がどのように運営されたのか、さらに後に箕面電車の郊外開発の一環として建設された豊中グラウンドの設置運営とどのように異なるのかである。

具体的には、設置者である電鉄の関与、そしてそこで開催されるスポーツイベントについての電鉄と新聞の連携、あるいは新聞社の関与である。以下で、改めて、この課題を整理する。

本稿の第一章、第二章では京浜電鉄の当時の各事業を考察し、羽田運動場は箕面電車のような、スポーツ施設の運営を伴う郊外戦略の一環ではなかったことを明らかにした。さらに、第三章でも、参詣客の多い羽田支線で、乗客招致のために羽田運動場を建設する必要はなかったが、押川春浪たちの努力とその成果としての日本運動倶楽部の組織化によって羽田運動場が建設されたことを明らかにした。また、第四章では、神戸東京倶楽部野球試合、都下中学連合野球試合及び『武侠世界』による連合大運動会などの新聞報道を考察し、それらが押川たちによって運営され。京浜電鉄は積極的に乗客誘致と自社宣伝を行っていないことを明らかにした。

以上をまとめれば、羽田運動場の建設については、押川春浪たちの働きかけがあって京浜電鉄が建設したが、開設後の運営も、ほぼ押川たちを中心とした「日本運動倶楽部」に委ねられ、実質的には、押川たちの野球同好の士たちのための施設として運営された。

そして、押川たちは羽田運動場を利用して様々なスポーツイベントを開催しているが、そこには、新聞社の一定の関与が伺えるものの、あくまで主体は押川及び、後には彼の雑誌「武侠世界」であった。また、この開催経過を見ても、京浜電鉄が「乗客誘致」のために積極的に動いた資料、証拠は発見できず、この点においても、大阪における電鉄と新聞社によるスポーツ大会という連携構造は存在しないと言える。

羽田運動場の経営、管理、利用の全てを日本運動倶楽部及び天狗倶楽部が行っている。羽田運動場は京浜電鉄の郊外戦略ではなく、むしろ日本運動倶楽部の「郊外」交遊建設の一環で

⁴¹⁾ 各新聞社における京浜電鉄の広告は沿線回遊の勧め、神社仏閣への参詣及び潮干狩などがほとんどである。例えば、東京朝日新聞 1911（明治 44）年 3 月 28 日付、中学連合試合開催期間中に、「川崎大師みち六郷 堤 花のとんねる 付近ノ桃花満開」という広告が掲載され、「花期中電車増發」を実施した。読売新聞 1913 年 10 月 12 日付では「京濱・横濱兩電車 連絡往復切符共進會入場券附割引金五十錢税共」という広告が掲載されているが、羽田運動場での大会に関わる広告は発見できていない。

あるといってもいいだろう。この目標は確かに、東京における新たな余暇文化実現の理想に燃えた構想ではあったが、羽田運動場の立地、さらに新聞社のスポーツ事業が大きく進展する時代に、彼らだけでは到底実現できる理想ではなかった。

本稿で展開した羽田運動場建設とその後の数年の動きは、日本のスポーツ文化として特異な時代、あるいは「過渡期」と捉えられるかもしれない。新聞社が本格的にスポーツ事業を展開していく1910年代であるが、その直前に、「早慶戦の中止」と「野球害悪論争」があり、これらに直接的に関わった押川春浪らのスポーツ愛好者、そして間接的に関わった社会的エリートたちがスポーツを楽しみ、それを一般社会に普及していこうとした拠点が、この羽田運動場だったともいえる。そして、本稿の主課題ではないが、間もなく、彼らの営為は、大阪朝日新聞や大阪毎日新聞による「甲子園野球」大会、都市対抗野球大会など、各新聞社のスポーツ事業に飲み込まれていくことになる。

参考文献

【論文・書籍】

- ・ 馬場信行「明治後期以降の京浜電気鉄道開設の羽田運動場に関する設置基本構想および整備、運営内容の分析」『都市計画論文集』Vol. 54-3、pp. 367-374、2019年
- ・ 原茂樹(2004)「東京・大阪両都市の新聞社による野球(スポーツ)イベントの展開過程」、『立命館産業社会論集』Vol. 40-3、pp. 115-134、
- ・ 慶應義塾『慶應義塾百年史』中巻前、1960年
- ・ 京浜急行電鉄株式会社『京濱電気鐵道沿革史』京浜急行電鉄、1949年
- ・ 京浜急行電鉄株式会社『京浜急行八十年史』京浜急行電鉄、1980年
- ・ 京浜急行電鉄株式会社『京急グループ110年史：最近の10年』京浜急行電鉄、2008年。
- ・ 国民新聞社運動部『日本野球史』厚生閣書店、2000年
- ・ 功力靖雄『明治野球史』逍遙書院、1969
- ・ 黒田勇『メディア スポーツ 20世紀』関西大学出版部、2021年
- ・ 日本体育協会『日本体育協会・日本オリンピック委員会100年史』日本体育協会、2012年
- ・ 坂井康広「戦前期における電鉄会社系野球場と野球界の変容」『スポーツ社会学研究』2004年、Vol. 12、pp. 71-80
- ・ 談躰「20世紀初頭のスポーツイベントと鉄道の『郊外』戦略」(黒田勇・森津千尋・水出幸輝編)『東アジアにおけるスポーツとメディア』創文企画、2022年
- ・ 大和球史『真説 日本野球史』明治篇、大正篇、ベースボールマガジン社、1977年

- 横田順彌『〈天狗倶楽部〉怪傑伝：元氣と正義の男たち』朝日ソノラマ、1993年

【新聞・雑誌】

- 『運動世界』
- 『時事新報』
- 『東京朝日新聞』
- 『東京日日新聞』